

---

# ペルソナ4 ~ 迷いの先に光あれ ~

四季の夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナ4〜迷いの先に光あれ〜

### 【Nコード】

N2842Z

### 【作者名】

四季の夢

### 【あらすじ】

影時間やタルタロス等の学園都市での闘いが終わったが一人の少年は眠りについてしまった。そして少年を守れ無かったと学園都市を去る一人の男。

それから二年、舞台は学園都市から一つの田舎町・稲羽市へと移る。そこで過去を背負い皆を守る為、瀬多洸夜の闘いが始まる

## プロローグ

？「ん？ここは？」

俺は気が付いたら見知らぬ場所にいた。車の中・・・見たいだな。そして椅子の真ん中に要る見覚えのある男と見覚えのない金髪の美女いた。

イ「ヒツヒツヒツ私はイゴールです覚えておりますかな？」

？「ああ、覚えてるに決まって要るだろ。俺にワイルドの力やペルソナについて教えてくれたのは他にもない、あんただ。」

そうこの男ーイーイゴールは二年前に世話になったんだ。そこでふつと隣を見てみる。

？「あんたは？」

俺は隣の美女に聞いてみる

？「お初にお目にかかります私はマーガレットと言います。以後おみ知りおきを」

？「ああよろしく、ところでエリザベスはどうしたんだ前までは彼女がここに」

イ「エリザベスは現在ここを出ております。ちなみにエリザベスは私の妹でもありますよ」

その言葉に俺は驚く

「妹！？それに出てるって何処に？」

そして今まで沈黙を守っていたイゴールが口を開く。

イ「エリザベスは彼を助ける方法を探すために現実の世界を回っておるのです」

・・・その言葉に俺は目を開く。

？「・・・彼って言うのはやはり。」

俺の言葉に静かに頷くイゴール。

イ「ええ。貴方と同じワイルドの力を持ち二年前に皆を救つ為に眠りについて仕舞ったあの彼です」

「・・・そうか」

その言葉に俺はイゴールから目を背ける。そんな俺にマーガレットが声をかける

マ「そんな顔をしないで下さい、あの子も定期的に連絡を寄越しているので心配なさらずに」

その言葉に俺は

? 「いや違うんだ」

マ「えっ?」

? 「俺はあいつが、ああなっただって知ってどうすればいいかわかんなくてな、卒業式が終わったらすぐにあの街を逃げ出したんだ。」

俺の言葉を静かに聞いてくれるイゴールとマーガレット。

「その事からずっと逃げていた俺に比べて、エリザベスはあれからずっと頑張ってたんだな。」

俺の言葉にイゴールは

イ「あれは仕方ない事だったので。あれは彼が自分で決めた事、貴方が自分を責める必要はありません」

イゴールの言葉に俺はただ己の情けなさしかなかったそんな時だった。

マ「それで貴方どうするのですか？」

？「えっ？」

マーガレットの言葉について聞き返す俺。

マ「このまま、何もしないままでもいいんですか？」

その言葉に俺は怒りを感じてしまった。

？「うるせえ！お前に何が分かる！・・・俺は逃げたんだぞ。その過去は消えないんだ」

俺はそう言つと、顔を下げる。

マ「でも、未来は変えれますよ。」

その言葉に俺は顔を上げた

マ「たしかに過去は決して変わりません。ですが未来は変わります。ここまで言えば、分かるでしょ」そう言ってくれたマーガレットの顔は何処か優しかった。

？「・・・そうだな、俺にも何か出来るかも知れないな、だが何をしようか？」

イ「実は今回貴方をお呼びしたのはまさにその事なのです」

その言葉に俺は表情が真面目になる。「

？「何かあるのか？」

イ「ゴールはゆっくりと頷く

？「だが影時間もタルタロスも、もう無いんだぞ。」

イ「いえ、実は今度貴方様が行く町で事件が起きます」

「稲羽市で!？」

イ「ゴールは頷く

確かに俺は両親が海外で仕事をするから、弟が叔父さんの家に行くことになり、ついでにお前も来いと言う事になり近々弟と一緒に稲羽市に行く事になったのである。

？「そこで俺に事件を解決して欲しいと」

イ「はい、それと実は貴方様の弟様にもお願いするつもりです」

イゴールの言葉に俺は驚く

？「総司を！？なぜだ？」

イ「それは、運命だからとしか言えません」

「そんな理由・・・はあ

そうだったな、あんたはそう言う人だった」

そう言った俺の言葉にイゴールは笑いながら答える。

「ヒツヒツヒツ理解が早くて助かります。」

そうイゴールが言った瞬間俺は視界が揺れた。

「どうやら、現実の貴方が目を覚ますようですね」



「・・・そうかイゴール、マーガレットありがとう」

「いえいえ、私は何も」

そう言ってヒッヒッヒッと笑うイゴール

マ「ふふふ、ではまた会いましょう・・・瀬多<sup>せた</sup>洗夜<sup>しんや</sup>様」

そう笑うマーガレット

洗夜「ああ！またな！」

そうやって笑顔で返す俺

あれ？そういえば俺マーガレットに名前乗ったけ？そう思いながら、俺は視界が暗くなった。

マ「ふふふ、本当エリザベスの言った通り自分一人で全部背負い込もうとして、それで何処と無く放って置けない人だったわ・・・またね洗夜」

洗夜が消えた場所でそう言うマーガレットの顔は何処か楽しそうだった。

イゴールからの呼び出しから数日がたった。

現在俺は、弟と一緒に稲羽市に向かう電車の中だ。

洸（稲羽市で一体何があるんだ・・・イゴールが俺に頼んだと言う事はペルソナやシャドウ関連か？それともあいつに関係が・・・）  
だが、幾らか考えても予測しか立てられない俺は結局ため息しかでなかつた。

洸「ハア・・・（こんな事ならあいつ等にも連絡すればよかったな、でも逃げ出した俺の事なんか相手にしてくれないか・・・だけど、あいつ等元気かな）」

とそんな事を思っていた時だった。

総「はっ！」

寝ていた俺の弟――瀬多総司が突然目を覚ました。

洸「おはよう、起きたか？」

総「・・・兄さん」

洸「なんかあったか？」

イゴールが干渉でもしたかな？あいつ夢の中で出て来るし。

総「いや、大丈夫なんでもない。」

洸「そうか、ならそろそろ降りる準備をしろ。間もなく着くぞ」

総「分かってるよ」

稲羽市が見えて来るのを確認して、そう言つと俺達は荷物をまとめ降りる準備をした。

洸「(さて、あの町で一体何が起こるんだろうな)」

## キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です

## キャラ紹介

瀬多 洸夜

《せた》 《こうや》

年齢：二十歳

外見：灰色の長髪、顔は上の下

使用武器：刀（片手剣）ペルソナ白書

ペルソナ：オシリス

能力：ワイルド・多重召喚（二体以上のペルソナ召喚）

趣味：剣術と料理

性格：家族と友達思いであるが一人で全て抱え混んでしまう。また優しさと厳しさを中立した性格で悪い時は自分だろうが他人だろうがキレル。

今作の主人公にしてペルソナ4の主人公の兄。

家から離れ一人で学園都市へ行き『私立月光館学園』の高等部に入学。

趣味でやっているだけあって、剣術はかなりの物。

それから、クラスが同じになった美鶴や明彦と友達になる。

そしてその夜の夢にイゴールが出て来て、色々と説明するがその時の洸夜は意味がわからず相手にしなかったが、次の日の夜に木刀で素振りの練習をしていた時に影時間に巻き込まれ、そして学園の場

所にあつたタルタロスに興味本位で侵入しシャドウと遭遇し異変に気付いた美鶴達と合流を果たしシャドウを撃退。(この時にペルソナ能力に覚醒)

そして美鶴達から事情を聞き、『特別課外活動部』に入部する。

武器の刀は美鶴から貰った物で世界に一つしかない、ある意味オールドメードな刀である。

それから3の主人公達が来た事により、皆のお兄さんの存在になり、ゆかり達からも信頼が厚かった。だが、自分の周りで敵味方なく、人が死に(千鳥は生存)目の前の命を守れ無かった自分を責めていた。

そして、自分達の卒業式が終わった後に3の主人公の状況を知り。

何も守れなかった自分に絶望し、3の主人公をどうすればいいかわからず、学園都市から逃げる様に去っていった。

その為、後日談は参加していない。

その後は家に帰りバイトや株又は近所の道場のお手伝いをしながら金を稼いでいた。

それから二年が経ち、イゴールとマーガレットの励ましにより自分にはまだ出来る事がある事を知り、巻き込まれる弟を守る事そしてまだ見ぬ事件解決の為に稲羽市へと向かう。

## 恋愛面

異性では美鶴との仲が一番良く。互いに意識していたが、互いに一

歩踏み出せず友達以上恋人未満の関係である。

主な使用ペルソナ

オシリス

物火氷風雷闇光

無――耐吸耐耐

洗夜が初めて出したペルソナで3の主人公とのコミュで姿が変わっている

姿は赤と白と黒の着物と甲冑を足して二で割った様な服に顔には龍の様な朱い仮面、背中には朱い翼そして右には大剣を持つ

風耐性

物理無効

ジオ系とムド系の技

そして数々物理技を持つ

攻撃型のペルソナ

ムラサキシキブ

物火氷風雷闇光

――耐吸耐耐吸

洗夜がイゴールの下で創ったペルソナ  
姿は青の長髪に白と桃色の着物を着て、周りには金色の羽衣があり。  
右手に本を持っている女性の姿をしたペルソナ

属性技

補助技

回復技

を多数持っているサポート型のペルソナ

この他にも多数のペルソナを使える。



霧の中の夢（前書き）

なんとか投稿です

## 霧の中の夢

洸「ふう座り過ぎて、尻がいたいな」

電車から降りて、俺が最初に言った言葉。座るのは楽だが、座り過ぎはだめだな

総「これから、どうすんだっけ？」

駅から出て辺りを見回す

総司

洸「叔父さんが迎えに来てくれる筈なんだが・・・」

俺も一緒に見回した時だった。

堂「おい、こっちだ！」

少し離れた所に叔父さん——堂島僚太郎とその娘さんの菜奈子が立っていた。

洸「いたいた！今行くよ」

叔父さんとは随分久しぶりだな。娘さんとは初対面だな。

堂「よ！二人とも写真よりハンサムだな。」

洸「ありがとよ叔父さん、そしてご無沙汰してます」

堂「本当に久しぶりだな。全く少し見ない間にでかくなりやがって」

洸「ならなかつたら問題でしょ。」

堂「はは！そりゃそうだ」

なんて世間話をしている。俺と叔父さん。そして挨拶する総司

総「初めまして」

そう言っって手を出す総司

「初めましてか・・・オムツを取り替えてやった事も有るんだかな」

そう言っって笑いながら握手に応じる堂島

堂「都会と違っって退屈かもしれんが・・・」

洸「大丈夫だよ、それよりそろそろ自己紹介したいんだけど」

堂「ああそうだったな、ほら菜奈子」

そう言っつて堂島の後ろから顔を出す菜奈子ちゃん

総「初めまして、瀬多総司です」

総司に続いて挨拶する俺

洸「総司の兄の瀬多洸夜だよろしくな菜奈子ちゃん」

俺は出来るだけ笑顔で自己紹介をした。子供が怖がらせちゃ駄目だからな最初が肝心だ。

菜「・・・//」

顔を赤くして堂島さんの後ろに隠れる菜奈子ちゃん

・・・なぜだ？顔が怖かったのか？等とショックを受けている俺

総「兄さん・・・いい加減に顔がいいの自覚してよ」

洗「何！いやいや居たって普通だろう！」

モテた試しもないんだぞ？顔がよかったら彼女が何故出来ない！

総「・・・ハア〜」

あれくの果てに、ため息まで吐かれる始末だ。

そんな菜奈子ちゃんを見た堂島さんは

堂「ははは！なんだ？お前照れてんのか？」

菜「／／／／」

バチン！

と思いつ切り堂島の尻を叩く菜奈子ちゃん・・・あれは痛い

あれから現在、俺達は車の中にいる。俺は窓から景色を眺めていた。

菜「お父さん……」  
そんな中菜奈子ちゃんが堂島さんに話かける。足をもじもじさせながら

洸「（あゝトイレだな）」

堂「ん？トイレか？」

ドス！

そう言つと菜奈子ちゃんに横腹を殴られる堂島さん  
そりゃ怒るでしょ。

そして、近くのガソリンスタンドで車を止めて車から降りる俺達

店員「いらっしやませー！」

堂「ガソリン満タンで頼む」

店「はい、ありがとうございますー！」

堂「ほら早くトイレ行っていい」

そう言つと菜奈子ちゃんはトイレに走って行く

店「トイレは左ね、左って分かる？お箸持たない方ね」

菜「菜奈子、子供じゃないよ。」

そう言つとトイレに走っていく

店「何処かお出かけで？」

堂「いやコイツ等が今日都会から来たんで迎えに行つてたんだ。ふ  
く俺も一服してくるか」

そう言つとタバコを吸いに行く堂島

店「へへ君達、都会から来たんだ、ここ田舎だから何にもないっし  
よ」

泷「確かに何も無いが空気はいいな」

総「確かに」

て言うか仕事しなくて大丈夫か？すると店員が総司に目を向ける

店「それに見た所、君は高校生だよな。高校生ったら部活やバイトぐらいしか無いでしょ？今、内のスタンドバイト募集してんだ。よろしくね」

そう言うのと、店員は手を差し出す。遠回しにバイトの勧誘か・・・

総「よろしく」

その手を笑顔で握る総司

店「そっちのお兄さんも」

そう言うって俺にも手を差し出す店員。

洸「（断る理由もないし）ああ、よろしく」

そう言うって、俺も手を握り返す。

店「!?!?・・・君」



俺が手を握り反した途端  
店員の表情が変わる

洸「?・・・なんだ?」

店「・・・いや!何でもないよ」

店員と喋っていると、菜奈子が戻ってきた。

店「おっと、僕も仕事しないと」

そして、作業に取り掛かる店員、その時

総「ぐっ!」

洸「!?!?総司どうした?」

菜「具合わるいの?」

突然頭を抑える総司に心配する俺と菜奈子

総「・・・いや、大丈夫  
少し立ちくらみがしたただけだから」

堂「ん？どうした」

堂島さんも一服から帰ってきた。

菜「調子悪い見たい」

堂「長旅で疲れたんだろ。今日は家に着いたら飯食って早く休んだ方がいいな」

総「・・・すいません」

堂「そう他人行儀になるな短い期間だが、俺達は家族だ」

洸「そうだぞ。お前は少し遠慮しすぎだ」

堂「そう言う事だ。分かったら全員早く車に乗れ行くぞ」

こうして、俺達は堂島宅に向かう。

堂島宅に着いた俺達は現在夕食を取っていた。

スーパーの惣菜とかが、今日は仕方ないと思うがごみ箱を見て見ると、惣菜のパックのゴミばかりこれは、育ち盛りの菜奈子ちゃんにはマズイだろう。

後で総司と話し合いだな。

そして、何気なくテレビのニュースを観ていた俺達

ア「今日から明日に掛けて稲羽市は霧が濃くなるでしょう」

総「霧？」

何気なく呟いた総司

堂「ああ、このところずっと霧が出るんだ」

へへやっぱ温暖化が原因かもね。

P i P i P i

すると堂島さんの携帯が鳴る

堂「もしもし・・・ああ分かった今から行く・・・飲まなくて正解だったな」

そう行ってコートを持って出掛ける準備をする堂島

菜「お仕事？」

堂「ああ、帰りは遅くなりそうだから先に休んどいてくれ。洗夜、  
総司、戸締まりとか頼むぞ」

総「はい」

洗「了解」

そう言うと、出掛ける堂島警察だからね忙しいだろ。

菜「・・・」

まずい・・・空気が重いなこつ言つ時は。

洗「総司、後は頼む。」

総「え！？」

泷「お前は菜奈子ちゃんとは打ち解けて無いだろ。と言つ訳でお休み」

俺はそのまま2階の部屋（ちなみに総司の部屋は俺の向かいだ）に待避する後ろで総司がなんか言っているが知らん。

子供は一对一の方が喋り安いんだよ・・・多分。

そして、部屋に着いたら

そのまま布団に入る。

泷「今日は別に変わった事は無かったが・・・油断は出来ないな明日から少し引き締めないとな」

そう言つて眠りに着く俺

-----

泷「何処だここは？」

俺は部屋で眠っていた筈だったが、気付いたら周りが霧で覆われている空間にいた。

右手には影時間の時に使っていた刀そして、ポケットには銃の形をした召喚器

どちらも部屋に置いてる筈だからここに有るわけがないんだが・・・

泷「・・・」

俺は周りを警戒しながら、前にゆっくりと進んで行く

どれくらい歩いただろうか不思議な事にいくら歩いても疲れがない。  
そう思いながら進んで行くと目の前にはいつの間にか扉が在った。

泷「・・・行くしかないよな」

俺は自分に言い聞かせ、扉の先に進む。

泷「ここも同じか」

扉の先にも、霧に覆われた空間しか無かった。  
・・・その時

？「やあ良く来ましたね」

泷「!?!?・・・俺をここに呼んだのはお前か」

俺は霧の向こうにいるまだ見ぬ者に語りかけた。

？「そう、貴方には興味がありましたからね」

洸「そいつは、うれしいね誕生日でも教えてやろうか？」

？「いや、それはいいよ。私が興味有るのは貴方の力の方だからね。他の者達とは少し違う力を私は見てみたいんですよ」

こいつペルソナ能力について知っているのか。

それに口調からして俺とは初対面じゃないかもな。

洸「なんだったら俺の力、試してやろうか？」

？「ふふふ、貴方では私に触れる事すら出来ないでしょう」

？に見下した風に言われる俺。

ここまで言われたら、引き下がる訳にはいかないな。

洸「後悔すんなよ」

そう言うと俺は、召喚器を取り出し頭に突き付ける

？「そんな物が無くても、貴方は力を使えるでしょ。」

洗「確かに使えるが、せつかくだからこれを使う事にするんだよ」

懐かしいなこの感覚。

それにこれも二年前の思い出の品だからな。

そう思い俺は引き金を引き叫ぶ。

洗「オシリス！ムラサキシキブ！」

すると、朱い仮面を付けた大剣と翼を持つペルソナと周りに羽衣を浮かせて、本を持ち和服を着たペルソナが現れる。

？「・・・二体同時ですか」

流石に少しは驚いた様だなこればかりは、『あいつ』にも勝つてたし、だが同時召喚はかなり疲れたよな・・・だから早めに蹴りをつける！

洗「いくぞ！まずは動きを止める！」



『マハラギオン！』

そう言つてムラサキシキブに技を出させながら、俺は？に刀を構えながら走り出す。巨大な炎は周りの霧を飲み込みながら、？を襲う

？「ぬうう・・・」

そしてオシリスで追撃！

オシリスの持つ大剣から斬撃を連続で繰り出す。

『木っ端微塵切り！』

？「ぐっ！」

洸「もらったああああ！」

そして俺は？に刀を抜刀しながら走り、？を切りかけた。・・・  
筈だった。

「（・・・手応えがない！？）」

どう言う事だ？確かに切った筈。  
等と考えている俺

？「ふふふ、だから言ったでしょう。いくらやっても無駄何ですよ」

洸「少しショックだな・・・！？」

なんだ？突然頭が・・・

？「どうやら、ここまでの様ですね」

その言葉と同時に周りの景色が歪んできた。

？「ではさよなら。貴方の行動を楽しませてもらいますよ」

洸「さて！お前は・・・一体・・・」

そう言いながら、俺の意識は途切れた。

――――

洸「はっ！・・・ここは」

辺りを見回すと、俺は自分の部屋にいた。

そして部屋の角に置いてある二年前から使っていた刀そして机には

召喚器、寝る前と何にも変わってなかった。

「ただの夢・・・じゃないよな・・・イゴール、今回ばかりはかなりヤバそうな気がしてきた」俺の呟きは部屋の中へと消えた。

事件の幕開け（前書き）

今回は日常だけです

## 事件の幕開け

現在、俺はジュネスの家電コーナーにいる。

え？理由？いやだつて叔父さんは仕事だし総司は今日から学校、菜奈子ちゃんも学校つまり暇なんだ。

つて言うけど本音を言つと昨日の夢が気になったんだよ。

俺の勘が正しければ今日、この町で何か起こるだろう

洸「にしても・・・田舎だから商品は期待してい無かつたんだが、結構あるな」

新型の大型テレビに冷蔵庫その他諸々

洸「にしても買い過ぎたな・・・」

現在、俺の両手には食材等が入った買物袋で埋まっている。

インスタントだけじゃ栄養がなさすぎるからな。

家電コーナーに居るのは、ただ偶然だ。そんな事を思っていると

店「おめでとつございます！三等のゲーム機をどうぞ」

洸「ん？」

どうやら、福引きをやっている様だな。

一等の商品は新型のテレビが二台か、つまり一等は二つか。

店「あ！お客さんもどうですか？」

俺に気付いた店員が俺にも福引きを勧めてくる。

泷「はは、やりたいけど生憎、福引き券を持ってないんだよ」

店「大丈夫ですよ！お会計の値段で決まりますから。5000円で一回なのでお客様は・・・」

店員にレシートを渡す俺のレシートは10、250円つまり二回か。

店「お客さんは二回ですね」

そう言って箱を差し出す

店員、どうやら箱からクジを取るタイプの様だな

泷「んじゃ、お言葉に甘えて・・・」

そう言って、箱からクジを引く俺。さてさて何が出るかな俺は箱か

らクジを二つ選んで店員に渡す

店「はい！ではお客さんのは・・・え！すごい！一等ですよ！」

そう言つて驚く店員

つか！？マジで！やったじゃん！、周りからも祝いの言葉を貰う俺。

洗「でも、持つて行くの

大変だし住所を教えるから運んで貰うと助かるだけど」

店「はい！大丈夫ですよ

後もう一つのクジもみてみますね」

そう言えばクジを二つ引いたの忘れてた。

店「え」と・・・え！嘘！こんな事って・・・」

突然、様子がおかしくなる店員。どうしたんだよ一体

洗「おい、どうしたんだ？」

店「その、このクジも・・・一等・・・です」

洗「・・・マジで？」

いやー一生分の運を使ったかも知れないな。

ちなみに現在、俺は近所を散歩中だ。

あと当てたテレビは二台とも堂島宅に送ってもらった今日の夜に届く予定らしいって言うか田舎だからって早過ぎじゃないか・・・

そう言えば店員が泣いてたな完全に赤字だし。

そんな事を思っていると、何やら辺りが騒がしい。

すると前の辺りでパトカーが止まっている

洗「（なんだなんだ事件か？・・・ん？よく見ると総司と叔父さんもいるじゃん後見知らぬ美少女も）」

そう思いながら、総司達の元に行く

洗「よっ！総司、今帰りか！叔父さんも仕事ご苦労様」

？「え？誰この人なんかすっごい格好いいんですけど」

俺の言葉に緑のジャージを着た女子生徒が反応する

そして俺に気づく総司



総「ああ、この人は僕の兄さんなんだ」

？「え？お兄さん！？」

洸「そうだよ」総司の兄の瀬多洸夜だ。よろしく」

里「あつども私は瀬多君のクラスメイトの里仲ちえです。そしてこっちは」

里仲は隣にいる大人しい紅い制服を着た女子生徒に目を向ける。

天「天城雪子です・・・」

何処か病弱そうなイメージが尽きそうな子だな・・・それにしても二人とも、かなり美人だな。お前・・・転校初日で二人も口説くとは。

洸「美人を二人も・・・両手に花だな総司」

そう言って親指を立てる俺

里・天「「び、美人!?」」

俺の台詞に二人とも顔が赤くなる。いやゝ初々しいね

総「兄さん・・・またそうやってからかって?」

洸「からかってないぞ!

美人に美人と言って何が悪い!」

里・天「「／／／／」」

俺の台詞に更に顔が赤くなる二人

洸「全く、俺が入学した時は入学式当日にクラスにいた女子を口説いたぞ」

総「そんな事をするのは、兄さんだけだよ」

そんな俺の台詞に少し呆れ顔の総司

堂「って言うか、何でお前ここにいるんだ?」

今まで沈黙を守っていた。堂島が俺に話かける。

洸「散歩だよ。そっちこそ何かあったの？」

堂「一般人に教えられる訳無いだろ」

確かにでもこつちも、昨日の夢の事も有るしどんな事でも情報が欲しいからな、適当にカマでも掻けるか。

洸「と言つても殺人でしょ」

俺の台詞に堂島は表情が変わる。

堂「な！？お前何処でそれを聞いた！」

・・・殺人か

洸「いや適当に言っただけ何だけど・・・」

堂「あ！お前カマ掻けたな！・・・全く早く帰れよ」

洸「叔父さんもね今日、家に帰ったらいい物があるよ」

堂「なんだ？いい物って？」

洸「帰ってからの楽しみだよ」俺の言葉に頭が捻る堂島

堂「なんだかわからんが  
出来るだけ早めに帰るって菜奈子にも言っといてくれ・・・おい！  
足立いつまで吐いてやがる！いい加減にしろ！！」

そう言って近くで吐いている刑事を一喝する堂島

足「うぶっすいません堂島さん・・・」

洸「さて俺も帰るか総司も早く帰れよ、里仲さん天城さんもまたな」

里・天「え！あっはい！さよなら」

そう言って両手に買物袋を持ちながら帰る俺

・・・今回の事件ペルソナやシャドウが関係してるかは、現時点では何にも言えないな。だが・・・これだけは解るとんでもない事がこの町で起ころうとしている事だけはな。もう目の前で誰かを失ってたまるか。

そしてその夜、二台の新型テレビを見て堂島は驚き。菜奈子は喜び。総司は苦笑いしていた。

そしてテレビの内、一台は一階に、もう一台は俺の部屋に置く事になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2842z/>

---

ペルソナ4～迷いの先に光あれ～

2011年12月11日01時36分発行